

まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第59号 (令和4年5月15日)

読者数: 671名 (募集中)

メール: hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

HP: <https://machizukurihiroshima.web.fc2.com/index.htm>

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人: 前岡智之、編集人: 瀧口信二

配信元: 広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

ウクライナに平和を！平和を我らに！



○中央図書館他の移転、予算成立
木立に囲まれた現中央図書館



○広島復興の軌跡・人物編
1952年の平和記念式典



○旧被服支廠の活用策・県の動き
大規模ワークショップ会場



○図書館移転問題・トークイベント
基調講演の会場

目次

- 巻頭言：夢を見た……………中国セントラルコンサルタント代表 前岡智之
- ひろしまのまちづくりの動き
 - ・広島市中央図書館他の移転、付帯決議付きで予算成立
 - ・広島中央公園の3パークPFI事業の進捗状況
- 広島復興の軌跡・人物編：丹下健三 その3……………編集委員 石丸紀興
- Hihukusho ラジオ報告：ゲスト 永田浩三（武蔵野大学社会学部教授）
- ほっとコーナー：元気のもと……………茶道講師 山際文恵
- 「旧陸軍被服支廠の活用策を探る広島県の動き」その2……………コメント 藤原美香
- 「図書館移転問題を考えるトークイベント2022」の報告（概要版）
- 総集編（1）「広島市中央公園アイデアコンペ（2011年実施）」の概要
- 編集後記：新たな世界観が求められている……………編集委員 瀧口信二

□ 巻頭言

夢を見た

中国セントラルコンサルタント代表 前岡智之



毎日ウクライナとロシアの戦争の情報に触れます。その被災の状況を見聞きすると戦争がいかにあってはならないと身に染みます。わが町広島はかつて原爆による壊滅的な破壊を受けました。一層平和が確認されるべき時にあたり、広島のみちづくりを天職と考え、その経緯と現状そしてこれからの間違いのない方向に進め続け、広島のみちづくりを孫子の代に誇りを持って語れるために、あるべき姿をお話しします。

窓からの陽差しが眩しい、鳥の鳴き声とともに目が冴えてくる。夢とは日ごろから考え続けていることに影響受けるものかもしれない。昨夜は、いつになく明確な夢を見た。

私はパイプ椅子に座っていた。左前方に演壇があり、誰かが話し続けている。

「市長だ」延々と予算説明をしている。その根拠として街の将来目指す姿やそのために実施する事業なのだと説明し続けている。後ろには役所の局長、部長が並んでいる。前列に並んで演説を聞いているのはおそらく議員たちだろう。彼らは市長の話聞く姿勢をとっているがちゃんと聞いていない。議員たちの後に大勢の人たちがいる。「市民だ」最後尾が見えない位に大勢が集まっている。あちらこちらを向いて話している。市長の話聞いてはいない無関心だ。

私はつい発言してしまった。「それは違いますよ」突然の発言に多くが振り向いた。

「いったいこの街をどういう街にしていこうとしているのですか」

市長は答える。「賑わいがあり多くの人たちが集まる活気のある街にしたい」「平和を希求し続ける街にしたい」いつも通りの内容だ。

「そのために何をどのようにしていこうとするのですか」

「中心部に賑わいの拠点を駅前にも賑わいの拠点を、この2つの拠点をつなぎ中心部ににぎわいづくりをする」

「そこが違うんですよ」「賑わいとか平和とかは、まちづくりの目標にならないんですよ。市民一人一人が納得した目標に向かって何を今どうしたらいいかわからない」「目標が持てないんですよ。だから無関心だし無責任なのですよ」

さっきざわざわしていた人たちは、じーっと聞いている。

「私から少しだけお話ししてもいいですか」「時代を少し前から始めて考えてみましょう、この街は江戸の時代からお城が築かれ繁栄がもたらされましたね。その後も地勢を生かして鉄道や港湾が開かれましたね。戦争時代に向かう中で日本の中心として機能した時代もありましたね。その結果、大きな悲しみに遭いましたね。ここからですよ、一瞬の悲しみを乗り越えて着の身着のままから不断の努力によって復興してきたのですね。その復興は法整備を原動力としたんですね。世界中から支援を受け期待と希望を寄せられて、市民が少しずつ出し合って公共空間を作り出し、美しい街の骨格を作りました。おかげで水と緑に囲まれ、海に開かれる都市の骨格ができたんですね。そして世界平和をいつまでも求め続けることをまちづくりの目標としました。それら公共空間の中心に位置づけられるのが平和記念公園や中央公園ですね。平和記念都市建設法の草案者である寺光忠氏は、「この街の一木一草までもが平和を発している街」と言っています。また平和記念公園の設計提案で一等となった丹下健三グループの提案は平和大通りから原爆資料館、慰霊碑を通して原爆ドームを望む(平和の軸線と言われている)その向こうに平和の工場(世界の子供たちが集い、学び、成長する。そして自国に戻りその国を創っていく)をイメージしています。これらのことからこの街のあちらこちらに自分たちの復興を伝え記録し、私たちのホスピタリティとしてこの街を訪れる人たちにこの思想を伝えていくまちづくりを提案します」

これを聞いた全員が「ウォーッ、それだそれだ」と。そして目が覚めたのです。

これには続きがあります。

なぜか最近この街は騒がしいんです。あちらこちらで集まりができ日夜話し合いがもたれています。「わたらの地区ができることは何だろうかのう」

大変なことになりました。ざわざわしていた中から「ちょっといいですか」「今、私たちの中から提案が出てきたのです」「それは、自分たちの街は自分たちから提案してもいいですか」と。

「任せておけないですよ」「市は、私たちが考えた案を紡いでくれればいいんじゃないですか」「そして全体として何を目標にするかを私たちに説明していただき了解を取ってくれればいいんじゃないですか」あちらこちらから、そしてやがて全体が「そうだ。そうしよう」と大合唱。

ここで夢は終わりですが、私は近い将来次のような時期がくると考えています。

このたび中央公園が市民が待ち望んだ姿に生まれ変わりました。そこでは市民の各地区で話し合い、提案された将来の姿が展示されています。そしてそれぞれがそれぞれを学び、修正を続けています。また生まれ変わった各地区の画像が紡ぎ合うひろしまのまちづくりの全体像がいつでもだれでも見ることができます。

ひろしまのまちづくりの動き

① 広島市中央図書館等の移転予算、付帯決議付きで成立！

中央図書館等の広島駅前の商業施設（エールエールA館）への移転計画は2022年度当初予算で成立。しかし、計画策定の当初から議会・利用者・有識者など関係者から広く意見を聞くことがなく、十分な議論が尽くされていないため、広島市議会は丁寧な検討と説明を求める付帯決議案を全会一致で可決した。

付帯決議の内容は、①関係者から広く図書館の再整備について意見を聞いた上で図書館整備方針を作成すること、②現地建て替え、中央公園内等での移転、エールエールA館への移転の3ケースを比較検討し、関係者の理解のもとに決定すること、③基本設計・実施設計の各段階においても、関係者の意見を広く取り入れること、以上の三点である。

付帯決議は内部告発した市職員有志の意見に呼応したものであるが、職員有志の意見の中でもう一つ気になる内容がある。それは都市公園法で定められた中央公園全体の建蔽率がオーバーするので、図書館等を追い出さなければならなくなったという指摘である。

サッカースタジアム（建築面積26,477㎡）や新規にパークPFI事業による施設を建設することにより、既存の公共施設の建築面積を加えると中央公園全体（面積約427,600㎡）の建蔽率上限12%を軽く超過するようだ。

この結果に対しては、中央公園全体のビジョンを持たず、行き当たりばったりで整備している市の責任を問わなければならない。新設のサッカー場や賑わい施設のために本来中央公園にあるべき中央図書館や青少年センター機能を消失させたなら、多大な文化的損失である。国際平和文化都市を標榜しているはずの市が本末転倒なことを行っていると言える。

市は付帯決議の内容を真摯に受け止めて誠実に実行しなければ、市民からそっぽを向かれるであろう。

② 広島中央公園の3パークPFI事業の進捗状況！

広島中央公園では現在、旧市民球場跡地の中央イベント広場、サッカースタジアム隣接の広場エリア、広島城三の丸に新設予定の展示施設周辺の3か所において民間の資金やノウハウを活用したパークPFI方式を採用している。

球場跡地のイベント広場は、整備・運営を担う事業者グループ（NTT都市開発（東京）など9社）が3月末に実施設計を終了。4月に起工式を挙げ、来年3月にオープン予定。

事業エリアは約47,000㎡で、中央広場を木造低層の飲食・物販施設8棟が囲み、1,000人以上を集めるイベントを年間90回以上開催する。一角にスケートボードパークも整備。

サッカースタジアムの広場エリアは、昨年8月に整備・運営を担う事業者代表企業のNTT都市開発など10社のグループを選定し、4月から基本設計に着手。来年8月に工事着工し、2024年8月の完成を目指す。ここだけで年間200万人の集客を想定。

三の丸では現在、展示収蔵施設の計画を検討中であり、その周辺を賑わい拠点として飲食・物販施設、駐車場、観光バスの発着所、多目的広場を設け、2024年度の開業を予定。なおPFI事業者は未定。

安易に同じような賑わい拠点を作ろうとしているが、飲食・物販施設などは採算が取れなければ民間事業者は撤退する。よほどの魅力がない限り、横断陸橋を渡ってまで足を延ばす人は少ないと思われるので、個人的見解だが、球場跡地以外は成功しないと思う。



木立に囲まれた現中央図書館



旧球場跡地のイメージ図



サッカー場前のイメージ図

○ 広島復興の軌跡・人物編 (第31回) 丹下健三氏の基本的発想を探る その3

～イサム・ノグチ氏の登場と慰霊碑をめぐる思いの交錯、そして丹下健三氏による決断～

平和記念公園の設計と実現過程で様々な思いが交錯した。ただ、この間の事情を知る人の間でも誤解が継承されていることを指摘しなければならない。この段階でイサム・ノグチ氏という彫刻家・ランドスケープデザイナーの登場によって複雑な動きが生じたのである。現平和大橋・平和西大橋の高欄を設計したことは明らかであるが、平和記念公園の慰霊碑の設計では、ノグチ氏の模型も残っているものの、これが採用されなかったことである。一部ではノグチ氏の慰霊碑デザインが却下されたので、その見返りに平和大橋の高欄のデザインが採用されたのだと理解している人が多いが、しかしこれは時代的な流れでいうと間違いということになる。すなわち、平和大橋の高欄は既に1951年には設計・施工され1952年3月には2橋とも竣工しており、慰霊碑は丹下による設計を基に1952年に建設され同年8月6日の記念式典に臨んだのである。なお原爆死没者慰霊碑という呼称はあくまでも通称であり、広島平和記念都市建設法による設置・建設の制度的枠組みが用意されて、正式には「広島平和都市記念碑」と呼ばれた。(以下敬称略)。

1. 平和大橋高欄で進行したデザイン

平和大橋の存在については説明するまでもないであろうが、広島のデルタを東西に横断する幅員百メートルの平和大通りにおいて元安川を横切る平和大橋、本川を横切る平和西大橋とセットになって、平和記念公園への導入路を形成している。この建設に関しては話題多く、戦後広島の復興過程を象徴しており、ノグチの登場がそれを増幅した。ノグチが高欄設計を依頼された過程は必ずしも明解ではないが、当時ノグチは東大の丹下研究室に出入りしており、そこで広島との関りもそこから生じたのであろう。



大橋高欄の現場を訪れたイサム・ノグチと丹下健三（中央の二人）

「日の出」とか「日の入り」とか両橋における高欄（勾欄とも書く）の意味についてはよく知られているので詳細は省略するが、丹下研究室を支えた浅田孝や大谷幸夫から聞き取りした時、研究室でベニヤ板を切り取って高欄の原寸大模型を作成したことを語っていた。現場をノグチと丹下が訪れて指示している写真も残されている。平和記念公園のコンペに入賞した丹下は、この橋の設計に直接関わってはいないが、ノグチを登場させ、つないだ役割を果たしたことになる。

2. 慰霊碑問題、碑文論争問題

浜井信三による「原爆市長」ではこの間の経緯の記述は、p. 206によれば、「慰霊碑の設計については、イサム・野口氏が『ぜひ私にやらせてもらいたい』¹⁾ といっ、彼独自の設計案を出してきたが、広島平和記念都市建設専門委員会で採用しなかったという。ノグチの設計案については詳細は省くが、家形埴輪の屋根の着想を得たといわれ、さらに原爆そのものを暗示するものであったとされる²⁾。「現在の碑は、丹下氏が自ら設計したものである。』と記されている。

後の丹下による回想として「わたしは始め、この設計は自分で進めるよりは、むしろ彫刻的に考えたいと思い、野口イサム氏にその設計をしたいと考えたのである。わたしは市長を説いてその内諾を得ることができた。彼はただちに、わたしたちの作業場へきて、何かに憑かれた人のように、粘土とたたかいはじめた。」生々しく報告し、「しかしこの案は、平和記念都市建設専門委員会において強く否決されてその実現が不可能となったのである。」(新建築昭和29年1月号)と内幕を暴露している。ここでは否決された理由を記述していないが、一説には被爆に関連した慰霊碑の設計者ノグチがアメリカ人であることも影響しているとされた。

実はノグチが慰霊碑の設計を断られたことで予想外の展開となった³⁾。そのころノグチは芸能界で有名となっていた女優の山口淑子(戦前中国では李香蘭として活躍)と結婚していたが、対応してきた広島市への不満を夫妻で訴えるために広島を訪れたのである。当然マスコミの取材が集中し、市内が大騒ぎとなった。事態を転換するところまでは動かなかったが、当時の社会情勢を反映した事件となったのである。



イサム・ノグチ設計の慰霊碑現存模型

かくして慰霊碑のデザインが丹下案で確定され、建設が始まる。結果的には埴輪型といわれる日本の歴史的な形態を引用する形で決着した。丹下はアーチについてはいろいろと思いを述べているが、なぜか慰霊碑についてはほとんど言及していない。複雑な思いであったに違いない。

この時大きな問題として浮上するのが、碑文であった。結果的には広島大学の雑賀忠義教授の碑文が採用

された。それがかの有名な「安らかに眠ってください 過ちは繰返しませんから」というもので、賛否両論、とりわけ「過ち」とは何事だ、主語がない、誰の過ちかとか、インドのパール博士のコメントもあって、批判は絶えなかった。この件に関しての詳細を省くが、原爆投下に対する思いの広がり、特にアメリカとの関係への思いは単純ではないといえる。

3. 慰霊碑の役割

1952年において開催された平和記念式典は、明確なスタイルに落ち着いた。これによって第1回、第2回、第3回の平和祭が主催者側と対面式の式典であったが、慰霊碑建設に伴い主催者・参列者共に向拝式というか、慰霊碑に向けての一方向での式典となったことである。それは丹下の軸線設定の意図したところであり、原爆ドームを含めた式典の形式が出来上がったのである。慰霊碑の意味は、式典の意味、式典のスタイルをも決めたといえよう。それまでの平和祭が平和記念式典へ、さらに慰霊・祈念式への大転換といえた。これは丹下だけの役割だったとは言えないが、平和記念公園の真の役割として捉えておかねばならない。もちろんこの形式に馴染まないという考え方もなくはないであろうが、それならば、より被爆を拒み、被爆者を弔うことにおいてより強い表明であるべきことを願いたいのである。



1952年に慰霊碑が完成した記念式典

丹下については一方的な礼賛か、その生い立ちや体質的な国家主義的傾向への反発か、両極に分かれ、必ずしも一元的な評価とされないが、歴史的な中での最大限可能な評価を下すことは当時代人の正当な役割ともいえよう。丹下論についてはまだまだ切り込んでいない領域があり、それは次回以降に譲ることとする。

(編集委員 石丸紀興)

脚注1) 浜井信三「原爆市長」(朝日新聞社、p.206)

2) 2018年3月19日付中国新聞によると「イサム・ノグチ設計の慰霊碑案「爆風キノコにも似せた」の見出しでノグチの当初の設計イメージについて報道されている。

3) ノグチ案却下の理由として日系とはいえ外国人設計であることが理由とされているが、丹下の弟子であった浅田孝からのヒヤリングによると、犠牲者名簿(過去帳)奉納を地下室にまで下りてしなければならず、式典と馴染まないことが大きな理由であったと告げられた。

参考分献: ①イサムノグチ著「広島のためのベル・タワー」(1950年、白いテラコッタと木枠)

②丹下健三・藤森照信著: 丹下健三(新建築社、2002年)

③被爆50周年図説戦後広島市史/街と暮らしの50年(広島市総務局公文書館、1996)

○ [「Hihukusho ラジオ \(第34回\) 2021.11.15](#) (*リンク参照) 報告

2020年6月より月2回、1時間程度、旧陸軍被服支廠を題材としたラジオ番組「[Hihukusho ラジオ](#) (*リンク参照)」がインターネット配信。これまで被服支廠の保存の動きに関わりのある人たちが登場している。今号は第34回目の永田浩三氏の発言の要点を紹介する。

ナビゲーター : 土屋時子 (広島文学資料保存の会代表)

ゲスト : 永田浩三 (武蔵野大学社会学部教授)

インタビュアー: 土屋時子



—経歴紹介—

1954年大阪生まれ。東北大学卒業。1977年NHK入局。ディレクターとして『ぐるっと海道3万キロ』、NHKスペシャル『社会主義の20世紀』などを担当。プロデューサーとして『クローズアップ現代』などを制作。2009年から武蔵野大学社会学部教授。著書は『ベン・チャーンを追いかけて』(2014年)、『奄美の奇跡・「祖国復帰」若者たちの無血革命』(2015年)、『ヒロシマを伝える～詩画人・四國五郎と原爆の表現者たち～』(2016年)他。

—社会人になるまで—

母親が広島出身で、子供の頃から夏になると母の実家に行き、山陽本線の停車駅を全部そらんじて大人をびっくりさせていたという。旧天満屋の一角に実家があり、原爆の時、母は家でミシンを踏んでいた。家は崩れたが、ミシンに救われて脱出し、浅野のお泉邸を經由し京橋川に出て、砂州で一夜を過ごす。(原民喜と同じルート) 夏なのにその夜は寒く、兵隊さんが焚火をしてくれたが、朝、目が覚めるとその兵隊さんはこと切れていたという。

大学生時代は内省的な芸術である影絵の制作・上演に熱中し、脚本、人形づくり、音楽、声優、人形操作などに取り組む。スクリーンの裏で演技することが性に合っていた。影絵が面白かったので映像の仕事に関わりたいと思い、結果的にNHKに就職する。

—NHK時代—

京都放送局のディレクターとしてスタートし、最初は科学的なものを追求したいと思う。ノーベル賞受賞者たちの業績を伝える番組や子供向けの科学番組に取り組んだが、自分自身良く分かっていないことに気づく。京都は暴力団の抗争や差別問題や多様な人間模様が渦巻く街であり、興味の対象を科学より、生々しい人間的なものに興味を抱くようになる。

東京に転勤したが、花形の教養番組ではなく、家庭部の老人健康班の担当となる。老人の認知症を扱ったラジオドキュメンタリー「おじいちゃん、ハーモニカを吹いて・・・」が1983年に多くの賞を受賞し、ドキュメンタリーを制作するチームの一員になる。

—広島との関わり—

四國五郎の息子光さんからたくさんの資料をいただき、四國五郎の評伝「ヒロシマを伝える」を書いた。光さんは私の本「ベン・シャーンを追いかけて」と「奄美の奇跡」を読んで、誘ってくださった。「ベン・シャーンを追いかけて」は、1954年に米国の水爆実験により第5福竜丸が死の灰を浴びた事件を機に、反核運動に立ち上がった米国の画家の話。米ソが核開発競争をしていた時期だから、スパイとか反米主義者と叩かれたが、自分の意思を曲げずに画家として、世の理不尽と闘った人である。

「ヒロシマを伝える」では、朝鮮戦争の影響により1950年の平和式典が中止になった時、8月6日に福屋百貨店の上階の窓からビラをまき、にわかには丁堀の交差点で反戦・反核の集会を開いたことを書いた。街中に張り出した反戦・反核のポスター「辻詩」は峠三吉が詩を書き、四國五郎が絵にした。その頃の活動を土屋清が戯曲「河」にして上演。占領下で言論統制の厳しいなか、平和の願いを込めて権力と闘った「炎の10年」だったと言える。

四國五郎を師と仰ぐガタロさんは、NHKのETV特集で取り上げられたテレビを見て、すごい人がいると興味を持つ。東京と横浜で展覧会を開催した。特に若い人に人気がある。苦勞に裏打ちされた自在を体現した人なので、ガタロさんという存在にあこがれる人が多い。

—広島のに足りないこと—

平和記念資料館は最近リニューアルし、原爆が一人一人の一生をいかに無残に破壊したかを絵・写真・物・言葉などで語りかけ、見る人に自分のこととして考えてほしいと訴えかけている。ただ、原爆を伝えるにはそれだけではまだ足りない。原爆の文学・音楽・映画など芸術作品も共有できるスペースが必要と思う。

昨年、堀川恵子さんが「暁の宇品」を出版され、広島を大陸侵出への基地として描いておられた。陸軍は船を持たないため民間から船を借り上げて兵隊や物資を輸送したが、守る武器は装備されず、命が粗末にされた。また暁部隊の若い兵士たちは、被爆後の市内の復旧・救援に当たったことなど、知らなかったことが多く書かれていた。軍都広島の顔を残す施設として、宇品につながる施設は残すべきだ。

—被服支廠の活用策—

被爆後、現存する倉庫が救護所として使われたことは、峠三吉の詩「倉庫の記録」にも登場するが、被服支廠がそもそもどういう施設だったのかはまだ知らない人が多い。

軍服や軍靴などがいかに劣悪だったか、一橋大学の吉田裕名誉教授の話がある。例えば、靴の鉾がなくてノリでくっついたり、牛革が入手できなくて遮水性の低い鮫革を代用したり、そんな軍靴を履いてジャングルを歩くと足から病気になって死んでいった。軍人の装備さえ整えられない状況で戦争を継続する実態があった。

土屋さんたちが保全活動を進めている原爆文学は世界に通用する宝であり、被服支廠はその展示場所として有効ではないか。一方、軍都広島の中の被服支廠の役割を理解し、無謀だった戦争や日本軍の実相（リアリティ）を体系的に学べる場所になれば素晴らしい。そういう施設は今の日本にどこにもないので、被服支廠の活用としてぜひ考えて欲しい。

コメント

幅広い仕事をされており、興味深い話がテンポよく飛び出てきたが、紙面の都合で半分ぐらいカットしている。是非ラジオの方も聞いてほしい。 (編集委員 瀧口信二)

□ ほっとコーナー

元気のもと

茶道講師 山際文恵

いくつかある趣味の中で一番長く続けているのが茶道である。
15歳の頃から習っている。

きっかけはお隣さんが表千家の茶道教室をされていた、ただそれだけで習い始めた頃はさぼりたい日もあったが、必ず声がかかるのでそうもいかず、同じ事の繰り返しのお稽古。

そのお陰か、私の通っていた高校では毎朝生徒が順番に校長先生にお茶をお出しするのが日課で、ある日、その時の所作がとても良いと褒められ、嬉しかった記憶がある。

地道に続けていると自然と身に付くものだと実感し、段々と茶道の奥深さを知り、今では玄関を開けた瞬間のお香の心地よい香りに癒されている。

1994年、アジア競技大会が広島で行われた際には、世界中の選手の方達を日本文化でおもてなしをした。お茶、お花、着物と大変好評であった。

中国の女子バレーボール選手の腰が私の肩の位置にあったのには驚かされた。

2017年、フランスの芸術家パーティーのオープニングセレモニーでお茶を点てて欲しいと友人に頼まれ、茶道具と着物を持参しての貴重な経験をさせてもらった。

今では茶道仲間との交流も楽しく、より一層茶道に浸っている。今年、還暦を機に自宅やカルチャースクールで今度は教える立場を経験させてもらう事になりドキドキしている。

着物も茶道の制服のように毎回着るのだが、段々と自分に合ったように着れるようになり背筋が伸びてシャキッとする感じが大好きだ。

そして、もう一つ長く続けているのが仏画。

新聞の小さなイベント情報に目が留まり通い始めて11年。月1回だが、墨をすり、筆で下絵をなぞって3年。今では色付けが出来るようになり、10個以上の作品が部屋に並んでいる。これも、少しづつの積み重ねである。

その他に習字・刺繍・裁縫と手仕事ばかり習っているが、足と目は衰えるばかり。だが、若い方からは刺激をもらい、年を重ねた方からは、これから役立つであろう知恵をいただく。

そして何よりも趣味を持っている方はよく笑い、とても元気！私もそうありたいと思っている。趣味は私の元気のもとである。



○ 「旧陸軍被服支廠の活用策を探る広島県の動き」報告その2

広島県は2月に有識者検討会議を開き、被服支廠の耐震化の実施設計や国の重要文化財指定に向けた歴史的価値の調査の検討を行い、来年3月までに意見をまとめる。

それと並行して被服支廠の活用策を考える有識者懇談会は3月に3回目を開き、来年3月末までに活用策の方向性をまとめる。

その傘下に市民からの幅広いアイデアを募るため50人程度のワークショップが置かれ、1月と3月に開催し、今後3回開催予定。これとは別に1回限りの100名前後の大規模ワークショップが4月に開かれた。ワークショップで出た意見は有識者懇談会での議論に反映される。



大規模ワークショップ会場

ワークショップメンバー：藤原美香さんのコメント

私が南区旧宇品線沿いに嫁いで約20年、この赤れんが倉庫がもつストーリーについてほとんど知らずに過ごしていた。実は、2019年当時の私は、県の解体案に賛成していた一人でもある。しかしその後、多くの市民の活動を知り、その中でアーキワーク広島の高田代表の

言葉にあった「場が持つ力」を実際に足を運び、赤れんが倉庫と向き合ったとき実感、保存を願うようになった。

しかし、まだ私のなかにモヤモヤが残っていた。それは、「近隣住民の声が聞こえてこない」ことである。私と同じ思いのメンバーと共に赤れんが倉庫向かいの住民をメインに話を聞かせてもらう活動を始めた。私自身が近隣住民の思いを知りたかったのもあるが、「近隣住民の声を置いてけぼりにしないで」と発信したかった。

しかし、この活動の中で、近所と自分の意見の相違から断絶の恐れもあって声を発しにくい状況であることを知り、近隣住民だからこそその配慮と私の想像力の乏しさを反省した。

日々、この赤れんが倉庫を目にする近隣住民がこの建物に愛着を感じてもらうために、地域の課題や活性に応じたコミュニティを形成することができる、そういった利活用も必要だと思う。個人的には、近隣の町内会会長との会話の「子ども会を世話してくれる大人もおらん」といった言葉から、広島県立大学のサークルの拠点とし、学生が主体で地域住民と産学官が連携した持続的な活動を行って欲しいと思っている。

この度の懇談会のコア委員会会長の岡田昌彰近畿大学教授は、「地域の人々の思いを調査する必要がある」と述べたと新聞に掲載されており、今後どのような形で行うのか高い関心を持っている。また、懇談会のコア委員はこの議論より前に旧広島陸軍被服支廠赤れんが倉庫に関心は低かったかもしれないが、だからこそより多角的に考えられると期待している。

この度、より多くの人に訪れてもらう為の手段である利活用の議論が出来るよう働きかけてくれた方々に感謝している。私たちのワークショップでも、活発な議論をしたい。そのために、もう少しメンバーとの対話の時間をもちたいと思う。

そのためには、限られた時間で行われる県のプログラムに頼るだけでなく、私たちでも自主勉強会・座談会を企画しようと思う。そこでの学びや気づきをワークショップで還元していく、そんな内容にしていきたい。数十年後「今のこの赤レンガの姿ね、私も一緒に考えたのよ」と誇れるよう議論していきたい。

○ 「図書館移転問題を考えるトークイベント2022」の報告（概要版）

4月にこども図書館移転問題を考える市民の会と広島文学資料保全の会の共催による「図書館移転問題を考えるトークイベント2022」が広島市青少年センターで開催された。

定員100名を超えるほどの参加者で熱気にあふれていた。

基調講演に作家・ジャーナリストの弓狩匡純氏を迎え、「広島にとって、図書館とは何か？」をテーマに1時間程熱く語る。

その後、共催者それぞれが活動報告を行い、会場からの質疑応答の形で議論を進める。



基調講演の会場

基調講演の要点

広島のアイデンティティは被爆からの復興であるが、被爆者がいなくなればそのアイデンティティも段々と薄れていく。新たなアイデンティティを作らなければ、広島は生き残れない。ウクライナの戦争で核兵器使用が問われている今こそ、広島の平和について発信すべき。

原爆文学や被爆証言などの被爆関係や復興関係の資料が分散したり、散逸したりしているが、どこかがまとめて収集・整理し、デジタル化して世界からのニーズに対応できる体制を整えなければいけない。その主体となるのが広島の公共図書館ではないか。

個人的な中央図書館の提案だが、サッカースタジアムの東側の広場エリアの地下に建設し、地上部は芝生広場とする。丹下の平和軸線上に採光用のトップライトを設け、建物として広島の平和をアピール。（地下部分は建築面積に算入されないので、建ぺい率の制約もクリア？）

中央図書館等移転問題に対する署名のお願い

広島市が実施しようとしている中央図書館等のエールエールA館への移転計画に対して「異議あり」の方は、[署名用紙](#)（*リンク参照）にご記入の上、「広島文学資料保全の会」の方に郵送ください。なお、締め切りは5月31日（火）です。

総集編(1)

○「広島市中央公園アイデアコンペ(2011年実施)」(*リンク参照)の概要

編集委員 瀧口信二

このメルマガもスタートして丸10年となり、これまでメルマガで取り上げてきたテーマを整理してみることにする。まず手始めにメルマガを始めるきっかけともなったアイデアコンペについてまとめる。

(1) 時代背景

2005年頃から旧市民球場跡地の活用について議論が高まり、市の方でも検討がなされ「跡地利用の方向性」を決定。それに基づき民間事業者からアイデアを公募して最優秀案を選ぼうとしたが、結果は該当者なしで、優秀賞2案を選定。

2009年、広島市は優秀2案の折衷による旧市民球場跡地計画を決定して予算化したが、議会の反対で足ふみ状態。一方で、市民球場の保存運動が勢い付いたが、一部外野スタンドを残して解体。2011年4月に秋葉市長から松井市長に交代して跡地計画はご破算となる。



(2) 目的

アイデアコンペの検討を始めたのは2010年の夏ごろから。市の整備イメージは事業コンペ優秀案で提案された「折り鶴ホール」と「森のパビリオン」をベースにした平凡なプランであり、市はこの地に対して確たるビジョンを持ち合わせていない。

今一度、「広島平和記念都市建設法」の精神に立ち返り、広島都市圏として広域的に街づくりを捉え、その中心に平和記念公園と中央公園を位置付け、平和と文化を世界に発信する拠点として整備する必要がある。

そこで、広く市民からのアイデアを募り、被爆100年(35年後)の広島市中央公園のあるべき姿を求める市民参加型のアイデアコンペを実施することにした。市民と共に広島市中央公園のあり方を問い直し、広島平和記念都市建設法に謳われている都市づくりの理念の再確認と普及を図ることを目的とする。

(3) 公募内容及び審査方法

平和記念都市建設法の精神を具現化するために、このエリアをいかなるコンセプトを持って整備したら良いか。現実的な制約条件に捉われないこと、自由な発想で提案していただく。

さらに、アイデアコンペの趣旨に賛同いただいた市民の皆さんに投票による審査に参加いただき、これからの「ひろしま」のあり方について全市民的な議論が深まることを期待する。

即ち、市民が自ら提案し、市民の投票により入賞を決める市民参加型コンペである。

- ・**提案者の参加**・・・提案者は事前登録し、第1次提案書を提出。市民の第1次投票による上位5者が第2次提案書を提出。上位5者は公開プレゼンテーションを行い、市民による第2次投票により入賞者を決める。
- ・**投票者の参加**・・・投票者は投票参加手続き(協賛金振込)を経て、投票用はがきを受取り、公開された提案作品の優劣を評価して第1次及び第2次の投票を行う。
- ・**投票方法**・・・提案された72作品の中から優秀と思われる3点以内を選んで、投票用はがきで投票。基本的にはHPに掲載された作品の画像を見て選択。3点選ぶ際に参考として評価の着眼点を設けている。第1次投票で上位5者を決める
- ・**第2次投票**・・・上位5作品の中から最も優秀と思われる1点を選んで、投票用はがきで投票。事前投票と公開プレゼン後の会場投票を集計し、最優秀賞1点、優秀賞2点、佳作2点を決定する。
- ・**特別審査委員会**・・・特別審査委員には、投票結果のチェック、特別賞の選定、公開プレゼンテーションでの代表質問等をお願いする。

審査委員は入賞作品以外から平和記念都市ひろしまに相応しい作品として特別賞を決定。

審査委員メンバーは、委員長 **平岡敬**(中国・地域づくり交流会会長、元広島市長)、**石丸紀興**(広島諸事・地域再生研究所代表研究員、元広島大学教授)、**高東博視**(安田女子大学非常勤講師、元広島市都市計画局長)、**ナスリーン・アジミ**(国連訓練調査研究所・本部長付特別上級顧問)

(4) 入賞結果

最優秀賞：タイトル「広島一歴史と川の道」

氏名 古池周文（広島市民球場跡地利用市民研究会）

中央公園及びその周辺に存在する広島の歴史を物語るものとそれに寄り添うように流れる川を一体に捉え、地に根付いたコンセプトをベースに置く。未来への伝言板、球場保存、市民球場記念ホール等、復興の象徴である市民球場の歴史や思い出を継承する。



優秀賞：タイトル「Peace Ring Park」

氏名 堀 弘明（広島市民）

丹下平和軸線上にオーバルパーク、ピースリング、グリーンアリーナ、スタジアム、国際展示場等を配置。各施設を人工地盤やペDESTリアンデッキで結び、中国・四国の拠点として一大メッセコンベンション及びエンターテイメントの地区を形成。



タイトル「TWO LAYER FOREST」

氏名 市原裕之（清水建設関西事業本部）

中央公園全体を一枚の起伏を持った人工地盤で覆い、人と車を分離し、開放的な緑の丘を提案。既存の文化施設は建替え時に合わせて人工地盤に統合し、公園全体が文化を継承する「市民の森」となる。



佳作：タイトル「未来へつづく新たな広島の姿」

氏名 大上泰弘（神戸大学大学院）

広島の特徴である水辺空間を活かすこと、情報・芸術といったメディアを用いて平和を発信すること、平和だけでなく都市の魅力を一層高めて世界に発信することを謳う。具体的には川辺に河上レストランを、球場跡地に平和音楽堂を提案。



タイトル「ひとつながりの街」

氏名 鬼頭朋宏/田中雄基（名古屋工業大学大学院）

バラバラになっているエリアを一本の道で縫うようにつないでいき、その道に様々な施設を配置して、ひとつながりの街にしていこうというコンセプト。旧球場跡地エリアには市民広場と市民キャンパスを配置し、中央公園と平和記念公園をつなぐ。



特別賞：タイトル「核廃絶世界平和実現を推進する本拠地」

氏名 石原 滋（広島市民）

やすらぎ川を新たに掘って平和島を作り、そこに国際平和関連施設を誘致しようという奇抜なアイデア。根底に核廃絶・世界平和実現を推進するための活動の場、世界交流発信の場にしたいという強い願いが込められ、広島平和記念都市建設法を具現化した提案として高く評価。



タイトル「大らかな風景～森と丘をつくる～」

氏名 高橋志保彦（高橋建築都市デザイン事務所）

原爆ドームと平和公園を望める丘を造り、その下に既存施設を内包し、丘から地下広場を経由して原爆ドーム側につなげる。旧市民球場跡地は市民が自由に使える自由広場とし、中央公園全体を市民が安全に安心して歩ける歩行者空間でつなぐ。また、公園の北側エリアは都心における世界市民の森を提案。現実味があり、示唆に富むアイデアが豊富。



コメント

無謀とも思える市民グループ主催のアイデアコンペだったが、予想外の提案数と市民の投票参加を得ることができた。当時、旧市民球場跡地の活用について市民的な議論の盛り上がりがあったからであろう。今、新サッカー場建設が始まり、中央公園内のあちこちにパーク PFI 事業が進められている。賑わいづくりばかりが目につくが、これが本当に広島ならではの中央公園のビジョンといえるだろうか。

□ 編集後記

新たな世界観が求められている

月日が経つのは早いもので、次号で第60号となり、丸10年の節目を迎えます。編集委員メンバーも高齢化し、次の世代にバトンタッチしなければならない時期がやがてやってきます。

折しも今、世界中が新型コロナウイルスに襲い掛かれ、ロシアのウクライナへの理不尽な軍事侵攻により、世界的な恐慌の時代に踏み込もうとしています。

例えコロナを乗り越え、ウクライナに平静が戻ったとしても、以前のような日常生活には戻れないのではないのでしょうか。

少し単純化していますが、地球の温暖化、それに伴う食糧危機、民主国家と専制国家の分断、それに伴う国際連合の無力化などなど、このまま進むと人類や地球の破滅が待ち受けているような気がします。

これからどんな生き方をするのが良いのか、今の私には描けませんが、新たな世界観が求められていることだけは確かです。

身近な広島のまちづくりにおいても、行政任せではうまくいかないことが顕著になっています。しっかりした人を議会に送り込み、行政の誤りを正せるような環境にすることが必要であり、そのためには市民一人一人が自覚しなければなりません。

どこにでもあるような都市活性化ばかりに気を取られて、広島市本来の果たすべき役割を見失っている市政は市民の力で変えていかなければなりません。まず身の回りを過ごしやすい環境に整え、そして広島平和記念都市本来の姿を実現していけば、自ずと世界市民から注目され、国内外から広島を訪れる人々が増えてくるであろうと確信しています。

(編集委員 瀧口信二)

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！**

(投稿は500字程度でお願いします)

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	響け！平和の鐘実行委員会代表
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表